［巻頭言］

序文にかえて
―現代における聖典の編纂と普及―

浄土真宗本願寺派総合研究所副所長　満井秀城

二〇一九年三月、当研究所の宿願であった『浄土真宗聖典全書』全六巻の刊行が完結した。この間における、関係各方面の方々には、あらためて深甚の謝意を、謹んで申し上げたい。

真宗学を学ぶ者にとって、これまでは、大八木興文堂刊行の『真宗聖教全書』全五巻が必携の基本文献であった。同書は、校正が行き届き精度も高く、どれほど多くの研究者が裨益を被っていたかは想像が及ばない。このような中にあって、『浄土真宗聖典全書』の刊行の意義は、最新の研究成果に基いた善本による校訂と、各巻の連絡ページなどの機能性と、更には各聖教についての丁寧な解説などにあると考えている。そして、現に新たなスタンダードの地位を固めつつあるのは、刊行に関わった当研究所の所員一同、慶びと感謝に堪えない。

『口伝鈔』第六条では、聖教はもともと「流通物」であって、たとえ野に捨ておかれたとしても、自ずと弘まっていくものである（『註釈版』八八一頁、取意）と示されている。確かにその通りではあるのだが、現代のように、経済至上主義や拝金主義、科学万能主義や実利主義が、大部分の人々の心を支配し、物質的には便利で快適なため、「生死出づべき道」が課題になりにくい時代にあって、はたして、本当に放っておいても弘まるのか、いささか不安になる。いくらこの上ない至宝でも、地中に埋まっていたのでは、「ここ掘れ、ワンワン」と示す「ポチ」

がいないと誰も気づかない。我々は、この「ポチ」になろうと思う。

聖典の「編纂」と「刊行」は、地中から地上に掘り出す作業であると思う。そして、現代は、あらゆる情報が溢れ、刊行物もアニメや娯楽書、あるいはハウツーのような実用書が店頭の大半を支配している現状（もちろん、上記のような書物もまったく無益とは言わない）において、人間の心の奥深くに真実を届けるための「聖典」に目が向く「普及」が欠かせない。

専如ご門主が、伝灯奉告法要の初日（二〇一六年十月一日）に示されたご親教「念仏者の生き方」の中に、

国の内外、あらゆる人びとに阿弥陀如来の智慧と慈悲を正しく、わかりやすく伝えたい

と、ご教示くださってある。同じご親教において明示された、「武力紛争」・「経済格差」・「地球温暖化」・「核物質の拡散」・「人権の抑圧」といった山積する重要課題に対しては、我々の力は微力であり、むしろ無力でさえある。苦難にある人びとに対して、直接的にはたとえ無力であったとしても、「阿弥陀如来の智慧と慈悲」を伝えることで、それがその人の「力の源泉」になるのではないか。そこに、聖典・聖教を刊行することの大きな意義があると考える。「正しく伝える」ための正確な聖典の「編纂」と、「わかりやすく伝える」ための「普及」に留意していかねばならない。

そして、さまざまな社会事象に対して、「時代即応の教学を構築する」上でも、正確な聖教の文に基くことが不可欠である。理科系の学問であれば、立論の正当性は実験によって証明される。確かな実験ノートがあって、それに則れば、誰がやっても同じ答えと結果が出る。それによって、初めて理論の正当性が立証されるのである。仏教や真宗の学問における正当性は、何に拠って立証されるだろうか。それは、経典などの聖教に根拠があるかどうかである。聖教に根拠を持たない理屈は、ただの独り言（モノローグ）に過ぎない。

そして、「正しく伝える」ためには、「正しく理解」することが不可欠になる。聖典を理解する時に、例えば「差

別意識」に汚染されて理解したのでは、その聖典は、「差別文献」に転落する危険性がある。「阿弥陀如来の智慧と慈悲」が説かれた聖典であればこそ、「阿弥陀如来の智慧と慈悲」に照らすことに徹して、読み取って行く姿勢が求められるだろう。我々の使命と責任は重い。今後とも、ご指導・ご叱正を切に念願し、序文にかえたい。

本論集の論考については、目次をご参照されたい。